

## 52年度生物学会，夏季研修会の報告

橋 本 光 政

昭和52年度の夏季研修会は例年と少し日時はちがっていたが、8月9日よりの3日間、佐用郡南光町船越のり寺において、天候にめぐまれ、盛会のうちに終わった。以下はその経過にしたがっての簡単な報告である。

### 第1日 8月9日

午後1時、南光町船越・り寺宿坊に集合。

開会式—昆虫館見学—採集（参道～池の谷）—標本整理—入浴・食事—夜の講演会。

シダ植物の多いことと、猿で有名な船越のり寺に集合した。バスで来た人、自家用車で来た人合わせて40名近くであった。生物学会会長の室井紳先生は富士山での会のため明日参加されるとのことで欠席。西播支部長の金澤龍先生、今回のほとんどのお世話をいただいた昆虫館長の内海功一先生の挨拶の後、京都大学理学部の村田源先生の紹介をいただいた。

その後、昆虫館へ行き、内海先生の案内でその中を見学。死んだ標本の展示だけとはことなり、生きた昆虫を四季を通じて飼育することの難しさや、見学者の認識のちがいなどといった苦労話もうかがいながら、参加者全員、ただその館長さんの熱意に感心するばかりであった。いただいたプリントによると、昨年度の飼育昆虫は170種以上にまでおよんでいることがわかった。

約1時間見学した後、参道に沿って生物の観察・採集に移った。特に当地は内海先生と稲田又男先生により初めて発見されたハリマイノデ、フナコシノデ、ルリデライヌワラビなどの type locality とあって、参加者の目はシダ植物にそそがれた感じであった。

参道のスギ林の下を歩いているとシャガが連続して見られるようになった。そのとき、「これは面白いですよ。」と村田先生が指さされた1株のシャガ。葉身の途中より先は光沢があり、根本側は全く光沢がなくなっているのである。説明によると、このシャガの株は生育の途中で、人工か自然現象のためかわからないが、天地が逆転され（株が反対側に倒れ）たために生じたとのことである。即ち、シャガの扁平な葉（単面葉といって表面は全てが裏）の日当りのよい側は光沢が生じ、日の当たらない側は光沢がなくなることから起こる。等々、形態学的な話もうかがいながら一行は池の谷へと案内された。

急な登り坂で、しばらくは左へ右へと折れ曲りながら採集、観察を続けたが、途中からその道もなくなり、林を縫って岩を越え、倒木をまたいでゆっくりと登った。大きな岩の上にオオハンゲが長い付属体を伸ばして歓迎

してくれていた。やがて、空気は冷たくなり、風穴の前に出た。思わず「寒い」と声を出しそうだった。年間最高温度は10℃以下との話。周囲を見廻すと、岩や倒木は全て苔むしており、オシダの株があちこち目につく。下枝をくぐり、草を押しつけて、再び道へと出た。そこからは下りであった。

ウラジロガシであったろうか、大きな株の周囲にオウギカズラが地を這って広がっていた。まれにしかない植物である。次々と後の人に伝えられ、ほとんどの人が1～2本の小植物を採集袋に納めたようであった。

宿坊に帰ると建部恵潤先生が、別の所に採集に行かれ、珍しいカビゴケの標本を採集されていた。ヤブニッケイの葉の裏にびっしりと蜘蛛の糸がへばり着いたように着生している。臭いが強く一か月後の今も、それをはっきりと思い出させるほどである。

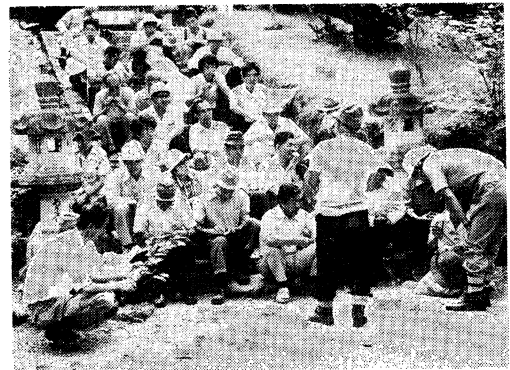
めいめい境内や部屋に入り、持って来た古新聞を出して標本の整理を始めた。

### 〔夜の講演会〕

入浴し、夕食をいただいた後、夜の学習会であった。まず、最初は、

「船越山の野鳥」と題し、兵庫県野鳥の会事務局長の早川守哉先生の講演。熱心な研究とその自然観をお話し下さった。そして終りに、10年前ぐらいにテープに記録された野鳥の声を再生していただき、明朝の楽しみを募らせた。次に、

「姫路市の形の海藻」と題して金澤龍先生の講演。先生自ら作製されたきれいな標本を見せていただき、その標本の作製法やテレビに放映された写真、更には海藻を利用した暑中見舞状の作り方など、豊富な経験に基づいた含蓄のあるお話であった。



## 第2日 8月10日

起床一休み堂まで探鳥会一朝食一採集会（寺谷川～<sup>奥</sup>海峠～奥の院～宿坊）一標本整理一夕食（懇親会）。

早朝、早川先生の説明を聞きつつ探鳥会へと出かけた。2日前までの暑さは全くなく、ひんやりとした空気を胸いっぱい吸いこみながら奥の院への参道を登った。スギ、モミ、トチノキなどの森林下で耳を澄まして野鳥の声に聞き入った。周囲の森林が伐採されたため、以前ほど種類は多くないとのことであったが、ビービーと甲高いヒヨドリ、ギャーと一声のカケス、アオゲラかアカゲラの声、キビタキ、イカル、カラス、ピーピーとホオジロ、ツツピーツツピーとシジュウガラなど聞くとることができた。ほんの20分ばかりの短時間ではあったが、自然を残すことの大切さを痛感した。

寺に帰って朝食後、再びそろって採集会へと出発。今日は県立山崎林業試験場の試験林を通過するとのこと、わざわざ山崎からその研究部長の前田千明さんがお越し下さっていた。境内を流れている寺谷川に沿って登ると野猿の餌場に着いた。早朝でまだ、観覧者は一人もいなかったが、飼育係の人が2人、我々のために餌をまいて猿を集めて下さった。

一群を率いるボスも出てきた。大きくて、毛並もきれいである。

一行は左に寺谷川の溪流を見つつ歩を進めた。右側は岩盤が露出しており、ヨコグロナキ、ユクノキ、イカリソウなどが見られ、左右がスギの植林になってきた頃、その林床にワサビが2株ほど見つかった。道はやがて三き路となり、谷の本流に沿って真直ぐ進むと千種町倉谷へ、左に折れると林業試験地を<sup>おね</sup>通って岡山県大原に通ずるといふ。全員そろったところで記念写真を撮り小休止。

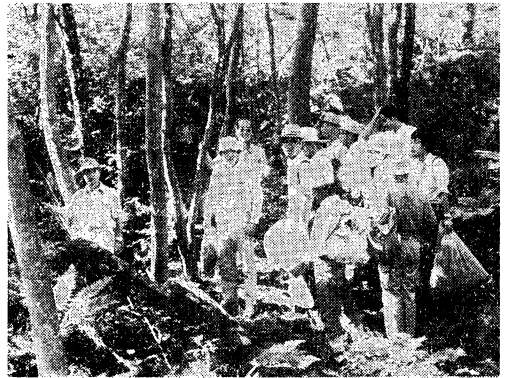
川原の草を分けて渡ると道は試験林内へ通じ、溪流も分岐していたとみえてそれに沿って歩いた。チドリノキ、キツネノカミソリ、エンレイソウ、コチャルメルソウ、フタバアオイ、オオバショウマ、シオデと手帳にメモを取りながら一行に続く。

小さな造林小屋に着いたところで、山崎林試の前田さんから説明を聞いた。最近では人手が足りず、種子取りもあまり行われなくなった。つぎ木やジベレリン処理の方法が進み、植林も新しい方法が考案されている。例えば、当試験地でも、スギの枝を直接または、ナイロン袋内で発根させ山へ持って入っている。また、スギの品種も多く各地で改良されたものが小面積ずつ植林され比較されている。等々……応用面をあまり知らない会員にとって多くが耳新しいことであった。

水のしたたり落ちる岩面にはみずみずしいワタバコが、また林内の小石の間にはイナモリソウが、更に小湿

地に出るとオタカラコウ、ショウブ、ヒロハノドジョウツナギ、タムラソウなどが次々と登場してきた。やがて道の登りが急となり、雑木林に入ると峠であった。そのまま真直ぐ下ると奥海へ出るが、一行は稜線へと進み、クリ、クヌギ、コナラ、イヌシデ、アカシデ、イタヤカエデ、ヤマウルシなどの雑木林の林床を歩く。今までの常緑の植林地と異なり、林内は明るく見通しもよい。分布的にあまり見られないアケボノスミレが点々と見つかる。見晴しのきく稜線へ出た。前田さんより再び林域の説明を聞き、平らな林床に入って昼食を取った。時刻は12時を少し回っていた。

午後はしばらく尾根を歩いた後、道を東へとって奥の院へと下った。ナツアサドリ、アオハダ、エイザンスミレなどを途中で採集しつつ下りは速かった。奥の院が見えてきた付近は、まだ直径1メートルを超す大きなモミ、スギ、ヒノキが急な斜面に残されていた。その林床に、昨日もあったオオハンゲがみんなの注目を引き被写体となっていた。



森林内での自然観察

奥の院からの下りは広い参道で、道端の草地からタニイヌワラビ、キヨタキシダ、ハクモウイノデ……いろいろなシダ植物が採集でき、深い林内ではオオバノハチジョウシダ、アカメクジャク、ミヤマイタチシダなども得られた。また、県下では珍しいミヤマトベラ、ナンゴクウラシマソウ、キバナサバノオ、スズムシソウ、シギンカラマツなどの貴重な植物を見つつ宿坊へと帰ってきた。

会長の室井先生は昼過ぎに着かれ、待っておられた。めいめいは採集袋から新聞紙へと標本の整理に移った。

夜は用事があって帰られた若干名を除いて全員食卓を囲んで、なごやかな懇親会を楽しんだ。当理事長からは来年度の計画、更に、長期の学会のありかたなども話題として出され、みなそれに協力をおしまないようであった。

### 第3日. 8月11日

#### 朝食一講演会一閉会式

夏季研修最後の日、暑さを全く感じさせない快適な朝であった。全員本堂に集まり、室井先生の「竹と笹の話」、稲田又男先生の「台湾での思い出」そして、村田源先生の「図鑑の引き方」および、「植物の進化と生活」といったお話を聞いた。村田先生の話された内容を项目的にメモしてみると「現在の地球上では進化した科が人間生活に密着している。」「シダから裸子までは化石が多く、系統も明らかにされてきた。しかし、被子はまだもう一步である。」「被子と裸子を比べてみると、成体となるまで、また、受粉してから受精結実するまでが被子の方がぐんと短く、したがって変異の固定が早く変異に富んだ種が生じている。」「ブナ帯は第3紀の植物の直系である。その原始性は次のことから言える。例えば、ブナ自身発芽して子葉をそのまま空中にさらすが、コナラ、ミズナラなどは同じ科の植物でも落果後、落葉の下で発芽し休眠芽を作り越冬する。そして翌春第一葉を出すとともにどんどん伸長する。」「大部分の植物は最適地ではなく、その地を強者に追われて強者の住みにくい所にやむなく住みついている。」「ソハヤキ要素と言われる植物には、キク科・アカネ科・ユキノシタ科などの比較的進化した科の中の Primitive なものが残っている。その生育地は岩場やガケ地などの森林外である。」「日本の高山植物は東シベリア系のもので、第4紀の水河期に北方性の植物が南下し、再び北上したと同時に高度化したものである。」「日本を含む東亜だけが南から北へ森林植生を連続して持っている。その他は高い山脈や、砂漠、海によって断絶されている。したが

って、北米の東側と東亜には温帯種によく似たものが分布しているが、前者は南へ連続しないのに対して、後者はずっと熱帯にまで連続しており、第3紀からの古い遺存固有種も多く含んでいる。」等々非常に多方面にわたってのお話であった。

閉会式を終って10時半であった。

最後に、遠路生物学会員の指導のためお忙しい中をお越しいただいた村田先生、本会のリーダー室井会長、金澤西播支部長、早川先生、稲田先生、そして、今回の採集会の計画、宿泊、案内のほとんど全てをお世話下さった昆虫館長の内海先生、その他参加された会員各位に深く感謝いたします。来年度のこの会が更に発展することを祈って報告を終わります。

#### <参加者>

室井 綽	増田 竜昭	内海 功一
渡辺 猛史	平畑 政幸	森本 実
岩谷 成彦	山本 義丸	西村 義孝
橋本 光政	山田 隆	伊賀崎香子
金澤 龍	今津 達夫	高島 千明
林 美嗣	家永 善文	藤尾 妙子
甘中 照雄	建部 恵潤	上岡 雅和
杉田 隆三	内波 秀一	稲田 又男
立花誠一郎	大西 洋樹	早川 守哉
矢内 正弘	大場 義憲	中村 元
橋本 宗一	杉田 靖興	稲田 幸子
讚井 毅	当津 隆	富川 哲夫
清水 裕慶	仲井 啓郎	

(申込順・敬称略)

#### <付録>

今回の研修会のために内海先生から御準備いただいたプリント2枚、今後の植物採集、および、分布考察の参考のため、また、再度昆虫館を訪れたり、自ら飼育を試みようとする参考資料として、以下に記録しておきます。

#### 船越山での特色のある植物

ヨコグラノキ	ユクノキ	ベニイトスゲ
ヒメノヤガラ	クモラン	ヤマタツナミ
ナツアサドリ	ベニカヤラン	
チトセカズラ	カツラギスミレ	(数の少ないもの)
オチフジ	アソキクバスミレ	サワグルミ
バッコヤナギ	アサダ	ツクバネガシ
メグスリノキ	ケバイカウツギ	サイカチ
キクガラクサ	ヒロハハネガヤ	ミヤコミズ
ビッチュウアザミ	フサナキリスゲ	ムヨウラン
キヨスミウツボ	ルリデラスズダケ	タマミズキ
ウエマツソウ	クロタエカズラ	
シロバナホトケノザ	ニッコウハリスゲ	

## シダ植物

ナガホナツノハナワラビ  
 オオヒメワラビモドキ  
 シラガシダ  
 ヒロハヤブソテツ  
 イワヤシダ  
 イワヘゴ  
 コタニワタリ  
 キレコミオシダ  
 カラクサシダ  
 アカメクジャク  
 アカメイノデ  
 フナコシイノデ  
 ヒメサジラン  
 イヌチャセンシダ  
 ハリマイノデ  
 サカゲカタイノデ  
 ホクリクイノデ  
 ルリデライヌワラビ

(数の少ないもの)

コシダ

シロヤマシダ  
 イブキシダ  
 ミヤマイタチシダ  
 ツルデンダ  
 ホラシノブ

## 鮮類 1)

キセルゴケ  
 クマノチョウチンゴケ  
 クモマタマゴケ  
 コキジノオゴケ  
 タチチョウチンゴケ  
 トサノサガリゴケ  
 エゾノシッポゴケ  
 ヨツバゴケ  
 チョウセンスナゴケ  
 タカサゴマイマイゴケ  
 トガリイタチゴケ  
 オカイヌノハゴケ

## 苔類 2)

マルバホラゴケモドキ  
 ハイスギゴケ  
 フォーリブッシュカンゴケ  
 ミヤマムクムクゴケ  
 イチョウウロコゴケ

(注)

- 1) 1953年  
 建部, 中島氏の記録  
 約 130種より  
 2) 建部氏の記録より

## 船越山での高等植物の概数

裸子植物	9
単子葉類	156
多子葉類	{ 合 348 離 200
シダ植物	139
合計	852

## 「千種川グリーンライン昆虫館」飼育昆虫一覧表

1	アオカナブン	22	エンマコオロギ	43	キアゲハ
2	アオスジアゲハ	23	オオカマキリ	44	キタテハ
3	アオハナムグリ	24	オオオサムシ	45	キチョウ
4	アカガネサルハムシ	25	オオゾウムシ	46	ギフチョウ
5	アカスジキンカメムシ	26	オオトビサンガメ	47	キベリハムシ
6	アカタテハ	27	オオナナフシ	48	キボシカミキリ
7	アシダラツユムシ	28	オオミズアオ	49	キマダラヒカゲ
8	アゲハ	29	オオムラサキ	50	キマワリ
9	アトボシアオゴミムシ	30	オカメコオロギ	51	キリギリス
10	イカリモンガ	31	オジロサナエ	52	ギンイチモンジセセリ
11	イタドリハムシ	32	オニヤンマ	53	クサギカメムシ
12	イナゴモドキ	33	オンブバッタ	54	クサキリ
13	ウスイロササキリ	34	カイコ	55	クサヒバリ
14	ウスタビガ	35	カブトムシ	56	クスサン
15	ウスバカゲロウ	36	カナブン	57	クツワムシ
16	ウスバシロチョウ	37	カマドウマ	58	クビキリギス
17	ウバタマムシ	38	ガムシ	59	クロアゲハ
18	ウマオイ	39	カヤキリ	60	クロオサムシ
19	ウラギンシジミ	40	カヤコオロギ	61	クロゲンゴロウ
20	エゾスズ	41	ガロアムシ	62	クロシデムシ
21	エビイロカメムシ	42	カンタン	63	クロヒカゲ

64	クロスジギンヤンマ	100	タイコウチ	136	ヘイケボタル
65	クルマバッタモドキ	101	タガメ	137	ベッコウヒラタシデムシ
66	クワエダシヤク	102	タケカレハ	138	ベニスズメ
67	クワカミキリ	103	タマムシ	139	ベニシジミ
68	クワゴ	104	チャミノガ	140	ヘリグロツユムシ
69	ケラ	105	ツチイナゴ	141	ホシハラビロヘリカメムシ
70	ゲンゴロウ	106	ツマキチョウ	142	ホタルガ
71	ゲンジボタル	107	ツマグロオオヨコバイ	143	マイマイカブリ
72	コオイムシ	108	ツユムシ	144	マダラアシゾウムシ
73	コオニヤンマ	109	テングチョウ	145	マダラカマドウマ
74	コカマキリ	110	テントウムシ	146	マダラスズ
75	コクゾウムシ	111	トノサマバッタ	147	マツムシ
76	コクワガタ	102	トビイロスズメ	148	マツモムシ
77	コシマゲンゴロウ	113	ドロノキハムシ	149	マメコガネ
78	コツバメ	114	ナキイナゴ	150	マルガタゲンゴロウ
79	コノシタウマ	115	ナシイラガ	151	ミズカマキリ
80	コバネイナゴ	116	ナナフシ	152	ミズスマシ
81	コブハサミムシ	117	ニワハンミョウ	153	ミツカドコオロギ
82	ゴマダラカミキリ	118	ノコギリカミキリ	154	ミドリヒョウモン
83	コムスジ	119	ノコギリクワガタ	155	ミヤマカミキリ
84	ゴミムシダマシ	120	ハラオカメコオロギ	156	ミヤマクワガタ
85	コムラサキ	121	ハラグロオオテントウ	157	ミヤマフキバッタ
86	コヤマトンボ	122	ハラビロカマキリ	158	メスグロヒョウモン
87	ササキリ	123	ハンミョウ	159	モモスズメ
88	ショウリョウバッタ	124	ヒオドシチョウ	160	モンキアゲハ
89	ジャコウアゲハ	125	ヒカゲチョウ	161	モンシロチョウ
90	シャチホコガ	126	ヒゲコメツキ	162	ヤスマットビナナフシ
91	シロコブゾウムシ	127	ヒゲシロハサミムシ	163	ヤブキリ
92	シロスジカミキリ	128	ヒシバッタ	164	ヤママユ
93	ジンガサハムシ	129	ヒメカマキリ	165	ヨコズナサシガメ
94	スジコガシラゴミムシダマシ	130	ヒメギス	166	ヨツボシオオキスイ
95	スズムシ	131	ヒメクワガタ	167	ヨモギハムシ
96	スミナガシ	132	ヒメゲンゴロウ	168	ラミーカミキリ
97	セスジツユムシ	133	ヒメヤママユ	169	リンゴコフキゾウムシ
98	センチコガネ	134	ヒラタクワガタ	170	ルリタテハ
99	センノカミキリ	135	フクラスズメ		